

---

# 死神くんと米田さん

たすく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神くんと米田さん

### 【Nコード】

N7816Y

### 【作者名】

たすく

### 【あらすじ】

自サイトより転載。

2000年ぐらいに書いたものらしい…クロス物で、死神くんが大神さんの前にやってくるお話。

ここは日本。帝都・東京。新宿・大帝国劇場。時は夜。

その大帝国劇場の一室で眠りにについている男がいた。正式に大帝国劇場の支配人になった大神一郎その人である。

大神は妙な気配で目を覚ました。

黒之巢会の天海とも違う。降魔を操った叉丹とも違う。神皇を蘇らせた京極とも違う。怪人たちともデル二エとも違う。

枕元に立てかけてあった神刀滅却に思わず手をかけた。もちろん、ベットの反対側にいるであろう人物には見えてないはずだ。

気配は動いてなかった。

(・・・・・・やるか。)

大神は起きるとの同時に神刀滅却を抜いた。

一閃。

斬った。いや、斬ったはずだった。

大神の前には目を疑った。三尺に満たないとも思われる小柄な男が宙に浮いている。大神に斬られた後は無かった。

「びつくりしたな、いきなり斬りかかるとは思わなかったよ」

小柄の男はそう言う。

大神は思わず叫んだ。

「何ヤツ!？」

「叫ばなくても聞こえてるよ。そういえば自己紹介がまだだったね。俺はこういう者さ」

男は懷から一枚の紙を大神に差し出した。

大神はその紙を警戒しながら受け取り、畏がないか調べてから内容を確認する。そこにはこう書かれていた。

大神は目を疑った。

「死神だど!？」

「俺は死神だよ」

「何のようだ!？」

大神は神刀滅却に靈力を込めた。

「死神の仕事は、わかっているはずだぜ? 大神さん」

「俺の名前を!」

「大神さん、言っておくが靈力をいくら使おうが、神刀滅却で斬ろうが、俺は殺せないぞ」

「く・・・」

「本当なら言っちゃいけないんだが、身寄りが無いみたいなんでね。息子的存在である大神さんの前に姿を現したのさ」

「何が言いたい!？」

「帝国陸軍中将及び元・大帝国劇場支配人でもある米田一基。彼の寿命はあと三日」

「何だど! 貴様!!」

大神は怒りが爆発しそうになるが、無理やり押させた。ここで怒って冷静さを欠ければどうなるかわからない。

「これも運命だからな」

「運命だど!」

「伝えたぜ、じゃあな」

死神は消えた。

消えたと同時に緊急連絡が入った。米田が倒れて病院に運ばれたと言う連絡が。

「まさか・・・あの死神の言うとおりに・・・」  
大神は病院に急いだ。

「いやあゝ、すまねえなあ」

病室のベットで米田は言った。

「なーに、転んじまつてな」

いつもの米田がいた。駆けつけていた花組一同、安堵した。  
しかし、大神は死神の言葉が気になっていた。

『米田一基。彼の寿命はあと三日。』

話があると言って、大神だけ病室に残った。

「大神、話ってなんだ？」

「支配人・・・」

「支配人は大神、お前だぞ」

「では、米田中将で」

「相変わらず堅苦しいヤツだな」

「すみません」

「話は戻るが・・・俺に話っていうのは？」

「米田中将、死神にお会いしましたか？」

「・・・！ おめえ、それを何処で・・・」

「やはり・・・」

大神は顔をしかめた。

そのとき、上から声がした。

「俺が言ったのさ」

「死神か！」

ほえる大神。

「ここは病院だよ。大声はいけないんだろう？」

「く……」

「死神さんよお……何故、コイツに言っただ？」

「米田さんの息子みたいなのもんだからな」

「俺はよお……誰にも知らせずに逝くつもりだったんだけどな」

米田は窓から星空を見上げながら言う。

「米田中将！」

「大神。これからはお前達若い者の時代だ。俺のような老骨は黙って去っていった方が良く様な気がしてな」

「何を言っんですか！？」

「死神よ。三日とか言わねえでさ。今、あの世とやりに連れて行ってくれねえか？」

「ほう。今までいろんなヤツを見てきたけど、米田さんみたいなヤツは珍しいな」

「なんて事を言っんですか！？ 死神など俺が……！！」

神刀滅却を抜こうとする大神。しかし、それを米田が制止した。

「大神、落ち着け。お前の気持ちは良くわかる。これも運命かも知れねえなあ……」

「しかし……！」

「大神、お前は帰れ」

「！」

「俺の死に様をお前に見せたくない」

大神は思わず涙がこぼれた。

「米田中将……」

「泣くヤツがあるか……」

「すみません。しかし、自分は……」

「相変わらずだよ、おめえさんはよ」

大神は涙を拭くと敬礼をする。米田もそれを見て敬礼をしたのだ

った。

三日後、米田一基逝去の知らせが大帝国劇場に届いた。

「やれやれ、面倒な仕事だったな」

ぺろりとペンを舐めて、手帳に仕事完了の印を書き込む死神。その死神の後にふわふわ浮いている米田がいた。

「死神さんよ。あいつらが泣いている所を見たくねえ。手つ取り早く、一馬や山崎、あやめ君の所に連れて行ってくんねえか？」

「わかった」

死神はそう言つと米田とともに天に向かって飛んでいった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7816y/>

---

死神くんと米田さん

2011年11月23日11時46分発行